

# 小学校国語科教育における漢字の由来に関する指導について — 会意文字・形声文字を中心に —

奥田俊博

九州女子大学共通教育機構、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2012年6月7日受付、2012年7月19日受理)

## 要 旨

現行の小学校国語科の教科書においては、漢字の由来の指導について、象形文字、指事文字、会意文字、形声文字、の概念、および具体的な用例を掲げている教科書が少なくない。しかしながら、これらの教科書が掲げている具体的な用例の六書としての位置付けと、現行の漢和辞典における六書としての位置付けが齟齬する場合も少なからず存する。

本稿では、現行の小学校国語科の教科書における漢字の由来に関する単元に挙げられている漢字のうち、会意文字、および形声文字として位置付けられている漢字を対象にして、通行している主要な漢和辞典に掲げられている解字との比較を行うとともに、主要な漢和辞典における会意文字、形声文字に対する解釈、および会意と形声の双方の性質を有する文字の位置付けについて述べる。併せて、現行の教科書が抱える課題点、および、混乱を来すことを回避する指導方法についても言及する。

## 1 はじめに

### 1.1 小学校国語科の教科書における会意文字、形声文字の取扱い

現行の小学校国語科の学習指導要領において、漢字の由来に関する指導は、第5学年及び6学年の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の(1)に「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する」とあり、そのウ（文字に関する事項）には、(ア)「第5学年及び第6学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと」とともに、(イ)「仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること」が掲げられている。この(イ)の「仮名及び漢字の由来、特質など」については、『小学校学習指導要領解説 国語編』（平成20年6月、文部科学省）に、「中学年の「ウ）漢字のへん、つくりなどの構成についての知識をもつこと。」を受けて、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解することを示している。具体的には、仮名や漢字がどのように形成され、継承されてきたかなどについて基本的な知識をもつこと、

また、表音文字としての平仮名や片仮名、表意文字としての漢字の特質を理解すること、文章が漢字仮名交じりで表記されていることや、漢字には原則として音と訓の読み方があることなどをまとめた知識として整理することなどである」と解説しているが、漢字の由来の指導について具体的な方法までは言及していない。

現行の小学校国語科の教科書においては、漢字の由来の指導について、象形文字、指事文字、会意文字、形声文字、といった六書に基づく文字学の用語を用い、象形文字、指事文字、会意文字、形声文字に該当する漢字を掲げる教科書が見受けられる。だが、これらの六書に基づいた分類は、漢和辞典によっても異なっており、たとえば、「休」の字は、小学校国語科の現行の教科書では会意文字として位置付けているが、漢和辞典には、会意文字と位置付ける漢和辞典とともに、形声文字として位置付ける漢和辞典も見える。とりわけ、形声文字と会意文字に関しては、教科書において形声文字と位置付ける漢字を会意文字に位置付ける漢和辞典や、形声文字と会意文字の双方の性質を有する文字に位置付ける漢和辞典も見える。

国語科教育の方面から見た象形文字、指事文字、会意文字、形声文字といった六書の指導や教材については、加藤道理「漢字の理解を深めるために—六書の扱い方—」（『国文学 解釈と教材の研究』11-1、1965年）、勝又昌義「漢字の知識（六書・部首）に関する教材の問題点」（『国語科教育』19、1972年）等の研究があり、また、形声文字の指導の役割や方法については、伊藤菊子「形声文字と漢字指導」（『言語生活』326、1979年）、佐藤公代「児童の漢字学習に及ぼす形声文字教授の役割」（『愛媛大学教育学部紀要 教育科学』43巻1号、1996年）などの先行研究が存するが、小学校国語科教育における会意文字と形声文字取り扱いについては、教科書の記載内容と漢和辞典の位置付けとの関係を中心に、なお検討の余地を残していると言えよう。

## 1.2 検討方法

本稿では、小学校国語科の主要な教科書において取り上げられている漢字の由来に関する単元を取り上げ、会意文字、形声文字を中心に、用語の概念、および、具体的な用例について整理を行う。次に、主要な教科書で取り上げられている会意文字、形声文字として位置付けされている漢字を対象に、漢和辞典等の位置付けについて分析を行う。また、併せて、会意文字、形声文字について、その用法の整理を行うとともに、会意文字、形声文字の指導において留意すべき事項について考察を行う。

## 2 主要な国語科教科書、および主要な漢和辞典における会意文字、形声文字についての取り扱い

### 2.1 主要な小学校国語科教科書における会意文字、形声文字についての取り扱い

本節では、現在出版されている主要な小学校国語科教科書のうち、5種類の教科書を取り

上げ、漢字の由来の取り扱い、とりわけ、会意文字、形声文字の取り扱いについて整理する。ここで取り上げる教科書の記述は、会意文字と形声文字に関する説明である。教科書の解説部分の引用にあたっては、数字の表記をアラビア数字に統一した。また、本文の表記や改行等に変更を加えた箇所があるが、知的意味が変わらないようにした。

5種の小学校国語科教科書のうち、会意文字、形声文字については、3種の教科書（以下、本稿では、これらの教科書を、教科書A、教科書B、教科書C、と称する）において説明がなされている。まず、教科書Aは、5年生の教科書において漢字の成り立ちを扱う単元を設けており、①「目に見える物の形を、具体的にえがいたもの」、②「目に見えない事がらを、印や記号を使って表したもの」、③「漢字の意味を組み合わせたもの」、④「音を表す部分と意味を表す部分を組み合わせたもの」に区分し、①を象形文字、②を指事文字、③を会意文字、④を形声文字として位置付ける。これらの文字のうち、会意文字の具体例として、「鳴」「信」「動」を、形声文字の具体例として「粉」を掲げる。さらに、形声文字については、練習問題として、「次の——線部の漢字は、④（引用者注…上記の④「音を表す部分と意味を表す部分を組み合わせたもの）」で説明しているように、音を表す部分と意味を表す部分を組み合わせてできています。どの部分が音で、どの部分が意味を表しているでしょうか。考えて、漢字辞典でたしかめましょう」という設問を掲げており、その漢字として、「この旅館からのながめは、絶景と評判だ」、「許可を得て、河口の近くでつりをする」、「案内板の前の車を直ちに移動してください」、「荷物を一週間預かってもらう」、「古い寺院のそばに、銅像が建った」、「貿易に関する国際会議が開かれた」の「館」「河」「板」「週」「銅」「際」を挙げている。

次に、教科書Bであるが、教科書Bも、5年次において漢字の成り立ちの単元を設けている。教科書Bは、会意文字について「2つの漢字を組み合わせて、新しい意味を表した漢字です。なかには、「森」のように3つ以上の漢字を組み合わせたものもあります」と説明し、形声文字は「すでにある漢字の、意味を表す部分と音を表す部分とを組み合わせてできたものです。「板」の字は、意味を表す「木（きへん）」と、音を表す「反（ハン）」とを組み合わせてできたものです。このような方法で、いろいろな意味の漢字ができるようになりました。漢字の多くは、この方法で作られています」と説明する。教科書Bは、会意文字の例として、「森」の他に「孫」「加」「集」「名」「間」「品」を掲げ、形声文字の例として「板」の他に「清」「線」「飯」「管」「想」「銅」を掲げる。また、形声文字の説明の後の問題では、「次の＝線の漢字のでき方を、漢字辞典で調べてみましょう」という問題が掲げられ、その漢字として、「財産」「京都府」「墓地」「犯罪」「組織」「職業」「承知」の「財」「府」「地」「犯」「織」「職」「知」を挙げている。

教科書Cは、6年次において漢字の由来の単元を設けている。教科書Cは、上記の教科書A、教科書Bと若干異なり、「漢字は、3千数百年も前に中国で、当時の中国語を書き表す

ための文字として作られました。はじめは、絵をえがくような方法によって、物の形をかたどったものでした。しだいに形が整えられ、現在使われているような形に変わってきました」といったように、文字史的な観点も取り入れた記述になっている。教科書Cでは、会意文字に関して、「意味によって漢字を組み合わせる方法です。例えば、「イ(=人)」と「木」を組み合わせて「休」が作られました。「人が木の下で休む」という発想です。「岩」は、「山」と「石」の組み合わせです。「山にある大きな石」を表しています。この漢字の成り立ちを、会意といいます」と述べ、会意文字の例として、「休」、「岩」の他に、「明」「鳴」「困」「位」「解」を掲げる。一方、形声文字については、「音を表す漢字と意味を表す漢字とを組み合わせる方法です。例えば、「河」は、意味を表す「氵(=水)」と、音を表す「可<sup>カ</sup>」とを組み合わせて作られました。「飯」は、意味を表す「食(=食)」と、音を表す「反<sup>ハン</sup>」とを組み合わせて作られました。この漢字の成り立ちを形声といいます」と述べ、形声文字の例として、「河」「飯」の他に、「洋」「粉」「供」「批」「誌」を掲げる。本稿で取り上げた3種類の教科書においては、具体的な漢字の例は異なるものの、会意文字と形声文字の定義については、大きな相違はない、と言えよう。

## 2.2 主要な漢和辞典における会意文字・形声文字についての取り扱い

一方、漢和辞典においては、会意文字、形声文字はどのように取り扱われているのだろうか。現行の主要な漢和辞典のうち、解説等において、会意文字と形声文字について説明し、また、漢和辞典に収録されている主要な漢字に対して、会意文字、形声文字等の位置付けを行っている辞典をいくつか取り上げて調査を行った。今回の調査の対象として用いた漢和辞典は、以下の3種類の漢和辞典である<sup>(2)</sup>。

〔1〕小川環樹・西田太一郎・赤塚忠『角川 新字源』(1963年、角川書店、以下、『新字源』と称する)

〔2〕藤堂明保・松本昭・竹田晃・加納喜光『漢字源』(1988年、学研、以下、『漢字源』と称する)

〔3〕尾崎雄二郎・都留春雄・西岡弘・山田勝美・山田俊雄『角川 大字源』(1992年、角川書店、以下、『大字源』と称する)<sup>(3)</sup>

上記の漢和辞典の他に、字源の解説書である白川静『常用字解』(2003年、平凡社、以下、『常用字解』と称する)<sup>(4)</sup>も調査の対象に加えた。すでに白川静は、『字統』(平凡社、1984年)、『字通』(平凡社、1996年)等に漢字の解説を施しているが、『常用字解』の漢字の解説について、「〔字統〕〔字通〕と異なるところはないが、なるべく中・高校生を含む多くの人を対象に、理解しやすく平易に解説することにつとめた」(「常用字解の編集について」と述べている点を重視して、『常用字解』を用いることにした。

上記の漢和辞典等のうち、まず、『新字源』は、凡例(14なりたち)において、「常用漢

字、漢字の構成上の基本になっている文字など総計約3500字には、特に「なりたち」の欄を設けて解説した」と述べる。さらに、「六書（象形・指事・会意・形声・仮借・転注）の分類によって、親字のしくみの主要な法則を示した。ただし、六書のほかに新たに象形指事・会意形声の2分類を設けた」のように、六書の象形、指事、会意、形声、仮借、転注の他に、「象形指事」と「会意形声」の2分類を設けた旨を述べている。これらの用語の定義については、『新字源』の付録「漢字のなりたち」の「2 漢字のしくみ」において述べられているが、そのうち、会意については、「象形指事<sup>(5)</sup>における指事の符号のかわりに文字を用い、しかもほとんどその文字の本来の意味のまま、基幹文字に会わせて、別の字を新たに造るのが、会意である」と述べ、一方、形声については、「基幹文字に、新字の音声を形（あら）わす文字（これを音符または声符といい、これに対し基幹文字を意符という）を組み合わせて文字を造るのが、形声である」と述べる。『新字源』の六書に関する記載は、文字史的な観点を視野に入れた記載になっているが、一方、『漢字源』においては、より初学者に理解しやすいような工夫が施されている。『漢字源』（付録「中国の文字とことば」）では、会意文字について「象形文字や指事文字を組み合わせたもの」と説明し、形声文字については、「片側に発音をあらわす音符を含み、他方にそれが何の事態に関係するかを示す偏（または旁<sup>つくり</sup>）をそなえたものである」と説明する。上記の3種の教科書の説明に最も近いと言えよう。

続いて、『大字源』（「付録 漢字について 2 漢字の構成」）では、会意文字について、「単独の指事文字や象形文字では表せない、やや複雑な事柄を表すために、2つ以上の構成要素を組み合わせて、新しい1つの意味を表した文字である。組み合わせには、同一字のものと、別字のものがある」と述べ、形声文字については、「既成の文字を2つ、または2つ以上用いて、意味（形）を表す文字と、音（声）を示す文字とを組み合わせ、新しい意味を表すように作られたのが形声文字である」と述べている。また、『常用字解』（「漢字の歴史と〔説文解字〕」（5 六書について））は、会意文字について、「会意は2つ以上の字の要素、象形や指事の字を組み合わせて、新しい意味を表すものである」と述べ、形声文字については、「形声は音符によってその字の音を表すものである。（中略）象形や会意の方法では表しがたい山河・鳥虫・草木などの事物の名は、だいたいこの方法で表す」と述べる。主要な漢和辞典の会意文字、形声文字の取り扱い、文字史的な観点を打ち出すか否かといった相違はあるものの、おおよそ、類同の位置付けであり、先に掲げた教科書の記述とも相適うと言えよう。しかし、『新字源』の凡例において、「象形指事」「会意形声」の2分類を設けた点は看過し得ない。とりわけ、「会意形声」については、本稿の問題提起と深く関わるところでもあるので、この点について、若干の検討が必要である。『新字源』では、付録「漢字のなりたち」の「2 漢字のしくみ」において「会意形声」について次のように述べている。



文字は象形指事・会意によって字形を主として発達するに対し、形声によって意味を主として発達する。音符は、実は語源ないしはその展開義をも示しているのであり、したがって功・攻・空のように同じ音符をもつ文字（これを諧声字<sup>かいせい</sup>という）は、原則として、系統的に類縁のある意味を表わしている。そこで、たとえば、菐・構・遘・觀・購、倫・論、經・徑・逕などの諧声字群は、それぞれ音符菐（竹を<sup>く</sup>組み<sup>み</sup>合<sup>あ</sup>わ<sup>わ</sup>せて作ったかご）・侖（順序よく<sup>し</sup>そろ<sup>え</sup>た竹<sup>ふ</sup>だ）・至（ま<sup>つ</sup>す<sup>ぐ</sup>な<sup>た</sup>て糸）の意味がわかれば、直接的ではないにしても、それから演繹<sup>えんえき</sup>してその音符が兼ねている意味と、それぞれの文字によって表わす意味とを比較的容易に類推することができよう。この辞典では、上記の又・工などのようにその字面<sup>じづら</sup>にその語源または展開義を示している文字、ないしは菐・至などのようにそれを指示していることの容易に知られる文字を音符として形声文字を造ることを、次の仮借文字の音符によるものと区別して、特に会意形声ということにした。

『新字源』が述べる「会意形声」は、音符の字面に語源または展開義を示している場合に会意と形成の双方の性質を認めていると看取される。本稿で取り上げている漢和辞典のうち、このような形声文字の音符に表意性を認めて、六書として定める用語以外の用語を設けている漢和辞典は、『新字源』の他に、『漢字源』『大字源』がある。『漢字源』は、「会意兼形声」という用語を用い、この用語について、「漢字の造字法の分類としては『説文解字』の「六書」の記述が基本となっているが、漢字によっては「六書」だけでは説明できないものがある。つまり、会意と形声の合成とみることの方がその漢字の成り立ちを理解するのに役立つものがある。本書ではそのような漢字については、「会意兼形声」として説明している。たとえば、「係」は、「人+音符系」であり、「系」は、ずるずると引くさまを示す<sup>し</sup>印と糸の会意文字であるので会意兼形声としている」と説明する。また、『大字源』は、「会意形声文字」という用語を用い、この用語について、「音符の文字が、その形声文字の音を示すとともに、相変わらずその本来の意味、またはその延長上の意味をもちつづけているものを、本辞典では、右の形声と区別して、会意形声文字とした」と説明する。形声文字の音符が担う意味とその音符となっている漢字の史的展開との関係について、若干の相違はあるものの、『新字源』『漢字源』『大字源』の「会意形声」「会意兼形声」「会意形声文字」（以下、本稿では、「会意形声」または「会意形声文字」と称する）の概念はおおよそ同一であると認めてよいであろう。

### 3 教科書が掲げる会意文字、形声文字の具体例と漢和辞典等の位置付け

#### 3.1 教科書が掲げる会意文字の具体例

会意文字、形声文字を取り上げている教科書は3種類見えるが、これら3種の教科書が掲げる会意文字は、都合16種の字であり、そのうち、10字が会意文字以外の文字に位置付け

ている漢和辞典が1種以上見える。その一覧を示すと、以下のようになる。

### 〔3種の教科書が掲げる会意文字一覧〕

※☆印の漢字は、4種の漢和辞典等が会意文字と位置付ける漢字であり、括弧内の辞典は、会意文字以外の文字に位置付けている辞典である。

(1) 休 (『新字源』『大字源』)

☆(2) 位

(3) 加 (『新字源』)

(4) 動 (『新字源』『大字源』『漢字源』『常用字解』)

☆(5) 名

☆(6) 品

(7) 困 (『常用字解』)

(8) 孫 (『大字源』)

(9) 岩 (『常用字解』)

☆(10) 明<sup>(6)</sup>

☆(11) 林

(12) 信 (『大字源』)

(13) 解 (『新字源』『大字源』)

(14) 間 (『新字源』『大字源』)

(15) 集 (『大字源』)

☆(16) 鳴

以上掲げた漢字のうち、(1)「休」、(3)「加」、(4)「動」、(7)「困」、(8)「孫」、(9)「岩」、(12)「信」、(13)「解」、(14)「間」、(15)「集」の漢字は、教科書では会意文字として位置付けられるが、漢和辞典によっては、会意文字以外の文字として位置付ける辞書が見える。

### 3.2 会意文字以外の文字に位置付ける漢和辞典等が見える例

教科書において会意文字として位置付けられながら、上記の漢和辞典において他の文字としても位置付けられた10字のうち、(7)「困」、(9)「岩」は象形文字としても位置付けられる文字である。(7)「困」は、『新字源』『漢字源』『大字源』が会意文字として位置付けるが、『常用字解』は「象形。口の形の枠の中に木をはめて、出入りを止める門限(門のしきみ。門の止め木)の形」と解説する。(9)「岩」も同様であり、『新字源』『漢字源』『大字源』が会意文字に位置付けるが、『常用字解』は「象形。もとの字形の<sup>がん</sup>岩は、山上に岩石が重なっている形で、その全体が象形である」のように象形文字として位置付ける。(9)「岩」につ

いては、現行の字形を対象とするか、元来の字形を対象とするかによって位置付けが異なるのは首肯されるが、(7)「困」については現行の字形を対象としており、解が揺れていると言えよう。

また、(1)「休」、(3)「加」、(8)「孫」、(12)「信」、(13)「解」、(14)「問」は、形声文字としても位置付けられる漢字である。(1)「休」は『漢字源』『常用字解』が会意文字と位置付けるが、『新字源』は、「形声。人と、音符メヅウ→キ (木は誤った形。かぼう意→畜キ) とから成り、かばい、さいわい、転じて「やすみ」の意を表わす。一説に、人が木陰にいこう会意字という」と解説し、『大字源』は「形声。意符の人(ひと)と、音符のメヅウ→キ(=柔ヅウ。木の芽の出た形。とどまる意=駐キ) とから成る。人がとどまる、歩くのを止める意。一説に、音符のメは、かぼう意(=畜キ)で、かばい、さいわい、転じて「やすみ」の意に用いるという。また、一説に、会意で、人が木陰にいこう意という」と解説する。ともに、一説として、会意文字としての解釈を紹介するが、これも解釈の揺れと見てよいであろう。(13)「解」も、『漢字源』『常用字解』が会意文字として位置付けるが、『新字源』『大字源』が形声文字として位置付ける。『新字源』は、「形声。刀と、牛と、音符角カ→ガイ(わける意→跛キ) とから成り、刀で牛を裂き分ける、ひいて、わける、わかる意を表わす」と解説し、『大字源』は「形声。意符の刀(かたな)と、牛(うし)と、音符の角カ→ガイ(さく意=割カ) とから成る。刀で牛を解体する、「とく」意。ひいて、「さとる」意に用いる」と解説する。また(12)「信」は、2種の教科書が会意文字として位置付け、『新字源』『漢字源』『常用字解』が会意文字として位置付けるが、『大字源』は形声文字として位置付ける。『新字源』は、「会意。人と、言(ことば) とから成り、人のことばと心とが一致する、「まこと」の意を表わす」、『漢字源』は「会意。言は、言明(はつきりいう)の意。信は「人+言」で、一度言明したことを押し通す人間の行為をあらわす。途中で屈することなく、まっすぐのび進むの意を含む。信義の信はその派生義」、『常用字解』は、「会意。人と言とを組み合わせた形。言は<sup>さい</sup>言(神への祈りの文である祝詞を入れる器の形)の上に、刑罰として加える入れ墨用の大きな針を置いて神に誓いをたてることばをいう。神に誓いをたてた上で、人との間に約束したことを信という。それで「まこと、まことにする」の意味となる。」と解説している。これらの漢和辞典等においては、漢字の成立段階の字形をどのように捉えるかによって解釈が異なるが、「人」と「言」をともに字義を有するものとして位置付けるのに対し、『大字源』は「形声。意符の言(ことば。古くは、口から出る心の意と考えられていた)と、音符の人ヅン→シン(古文は心シン。かきなる意=申シン) とから成る。口から出ることばが内なる心と重なって合致している、ことばが「まこと」の意」のように、「人」を音符として捉える。また、(3)「加」は、『大字源』『漢字源』『常用字解』が会意文字とするが、『新字源』は形声文字とする。『大字源』は、「会意。意符の力(ちから)と、意符の口(ことば) とから成る。「カ」の音は、おびただし意(=夥カ) と関係がある。力



を入れてことばを多くする、言いまくる意。ひいて、他人をしのご意に用いる」、『漢字源』は、「会意。「力+口」。手に口を添えて勢いを助ける意を示す」、『常用字解』は「会意。力と口とを組み合わせた形。力（<sup>すき</sup>禾の形）に<sup>さい</sup>臼（神への祈りの文である祝詞を入れる器の形）をそえている形で、<sup>はら</sup>すきを<sup>はら</sup>祓い清める儀礼をいう。すきやくわなどの農具は、神に祈り、よく祓い清めてから使用しないと、秋に虫が発生して作物を食べると考えられた。それで農具にお祓いを「くわえる」儀礼をし、収穫量の増加する（数量がふえる）ことを祈ったのである」と解説するのに対し、『新字源』は、「形声。意符口と、音符力リキ→カ（かさねる意→累ル）とから成り、もと、ことばを重ねて人をしいる意を表わしたが、転じて「くわえる」意に用いる。」と解説する。『大字源』『漢字源』『常用字解』の解釈はそれぞれ異なるが、本来的な字義から隣接的な字義への転化を想定している点で同一であると言える。一方、『新字源』の解は音符の「力」に表意性を認めている点で、会意文字に近いと言える。

(14)「間」も、会意文字とする解と形声文字とする解が存し、『漢字源』が「会意。間は俗字で、本来は間と書く。門のとびらのすきまから月の見えることをあらわすもので、2つにわけの意を含む」、『常用字解』が「会意。もとの字は間に作り、門と月とを組み合わせた形。門の中に月影のある形である解釈は誤りである。金文の字形には、門の上に肉（日月の月の形に似ているが、これは肉の形である）をおく形や門の中に外をかくものがある。祖先を祭る廟の門に肉を供えて祈る何らかの儀礼を示す字らしく、内外をへだてるという意味がある」と述べる。これらの解釈も、本来的な字義から隣接的な字義への転化を想定している点で同一である。一方『新字源』は、「形声。旧字は、門と、音符月ゲツ→カ・ケン（かける意→欠ケツ）とから成り、門のすきまの意を表わす」、『大字源』は「形声。意符の門（もん）と、音符の月ゲツ→カ（日は変わった形。すきまの意=隙キ・缺ケツ）とから成る。門の扉を合わせたすきまの意。ひいて、「あいだ」「ま」などの意に用いる」のように、形声文字に解するが、『新字源』の解は、音符である「月」に表意性を認めている点で、会意文字に近い。

このような音符の漢字に表意性を認めるという解釈をより明確にしたものが、会意形声文字であると言える。たとえば、(15)「集」は、『新字源』『漢字源』『常用字解』が会意文字と位置付けるが、『大字源』は、「会意形声。意符の木（き）と、音符の隹<sup>ウヰ</sup>→ヰ（隹は省略形。鳥が群がる意）とから成る。木の上に鳥が群がりあつまる意。ひいて、「あつまる」意に用いる」と解する。この場合の音符「隹」は、表意性を有することが明確になっていると理解されている。(4)「動」については、教科書は会意文字として位置付けるが、『新字源』『大字源』『常用字解』は形声文字として位置付け、『漢字源』は会意形声文字として位置付ける。『新字源』は、「形声。力と、音符重<sup>チュウ</sup>→トウ（上下する意→舂<sup>シュウ</sup>）とから成り、力をふるう、ひいて「うごく」意を表わす」、『大字源』は「形声。意符の力（ちから）と、音符の重<sup>チュウ</sup>→トウ（ふるう意=揺<sup>ユ</sup>）とから成る。力を振るい出すの意。」と解するのに対し、『漢字源』は、「会意兼形声。重は「人が地上を足で突く形+音符東（つらぬく）」の会意兼

形声文字。体重を足にかけ、足でとんと字面を突いたさま。動は「力+音符重」で、もと、足でとんと地を突く動作」のように、「動」の「重」の部分が会意形声文字であると解釈する。

### 3.3 教科書が掲げる形声文字の具体例と漢和辞典等の位置付け

3.2では、3種の教科書が掲げる会意文字を対象に、漢和辞典における位置付けの揺れを見てきたが、ここでは、3種の教科書が掲げる形声文字を取り上げたい。3種の教科書が掲げる形声文字は、都合13種の字であり、そのうち、12字が形声文字以外の文字に位置付ける漢和辞典が1種以上見える。その一覧を示すと、以下のようになる。

#### 〔3種の教科書が掲げる形声文字一覧〕

※☆印の漢字は、4種の漢和辞典等が形声文字と位置付ける漢字であり、括弧内の辞典は形声文字以外の文字に位置付けている漢和辞典等である。

(1) 供 (『新字源』『漢字源』『大字源』)

(2) 清 (『新字源』『漢字源』)

(3) 想 (『新字源』『漢字源』)

(4) 批 (『漢字源』)

(5) 板 (『漢字源』)

(6) 線 (『新字源』『漢字源』)

(7) 河 (『漢字源』)

☆(8) 洋

(9) 管 (『漢字源』)

(10) 粉 (『新字源』『漢字源』『大字源』)

(11) 誌 (『新字源』『漢字源』)

(12) 銅 (『漢字源』)

(13) 飯 (『漢字源』)

これらの漢字のうち、漢和辞典において位置付けに揺れが見られる漢字が12字存するが、これらの揺れの見られる文字は、会意形声文字に位置付ける漢和辞典が見える文字である。たとえば、(10)「粉」は、4種の漢和辞典のうち、3種の漢和辞典が、「会意形声。米と、わかる意と音とを示す分ㄗとから成り、くだいた小米、ひいて「こな」の意を表わす」(『新字源』)、「会意形声。「米+音符分ㄗ」」(『漢字源』)、「会意形声。意符の米(こめ)と、意符と音符を兼ねる分ㄗ(わかる意)とから成る」(『大字源』)のように会意形声文字に位置付けている。(1)「供」も同様であり、「会意形声。共キョウ(そなえる、とも)に人を増し加え

て、共と区別し、おもに「そなえる」意に用いる」（『新字源』）、「会意兼形声。共は「口印（ある物）+両手」の会意文字で、供の原字（下略）」（『漢字源』）、「会意形声。意符の人（ひと）と、意符と音符を兼ねる共キョウ（ささげる意）とから成る」（『大字源』）のように会意形声文字に位置付ける。

## 4 会意文字、形声文字の指導のありかた

### 4.1 会意文字、形声文字の位置付けの揺れ

本稿では、小学校国語科の主要な教科書において取り上げられている漢字の由来に関する単元を取り上げ、会意文字、形声文字を中心に、用語の概念、および、具体的な用例について整理を行い、また、主要な教科書で取り上げられている漢字のうち、会意文字、形声文字として位置付けられている漢字を対象に漢和辞典等の位置付けについて分析を行った。これまで述べてきたように、教科書に会意文字として掲げた16種の字のうち、10字において位置付けの揺れが見られ、また、形声文字として掲げた13種の字のうち、12字において位置付けの揺れが見られた。問題は、それだけに留まらない。先に述べたように、教科書Aは、「館」「河」「板」「週」「銅」「際」の音の部分と意味の部分がどこであるか、という問題を出しているが、「館」は、3種の漢和辞典（『新字源』『大字源』『漢字源』）が会意形声文字とし、「河」「板」「銅」は1種の漢和辞典（『漢字源』）が会意形声文字とする。また、「際」は、『新字源』『大字源』が「形声。阜と、音符祭イ（きしりあう意→磋イ）とから成り、おかとおかが接する所、ひいて、「きわ」の意を表わす」（『新字源』）、「形声。意符の阜（ついじ、かべ）と、音符の祭イイイ（つぐ意=接セツ）とから成る。両方の牆壁<sup>しょうへき</sup>のであうつぎ目の意。ひいて両者の隣り合った間隙<sup>かんげき</sup>の意、また、「きわ」の意に用いる」（『大字源』）のように形声文字と位置付けるが、『漢字源』は、「会意兼形声。祭は「肉+手+示（まつり）」からなる会意文字で、お供えの肉をこすってよごれをとることを示す。こすりあわせるの意を含む。際は「阜（かべ）+音符祭」で、壁と壁とがこすりあうように、すれすれに接することをあらわす」のように会意形声文字とし、『常用字解』は、「会意。自<sup>じ</sup>と祭とを組み合わせた形。自（β）は（中略）神が天に陟<sup>のぼ</sup>り降りするときに使う神の梯<sup>はしご</sup>の形。その前の祭壇（示）に手（又<sup>ゆ</sup>）で肉を供えて祭ることをいう。そこは天から降りて来る神と人とが相接する所で、際とは神人の際、「きわ（接するところ。物事の窮<sup>き</sup>きるところ）」をいう」のように会意文字として位置付ける。

このような問題は、教科書Bが漢字辞典の調査の対象とした漢字についても言えよう。教科書Bが掲げた「財」「府」「地」「犯」「織」「職」「職」「知」については、『漢字源』がすべて会意形声文字として位置付ける。また、「犯」については、『新字源』『大字源』が、「形声。犬と音符匚ハ（はみだす意→汜ハ）とから成り、もと、犬が囲いを破って人にかみつく意を表したが、転じて、分限を越えた悪い行ないの意を表わす」（『新字源』）、「形声。意符の犬

(いぬ)と音符の匚ハツ(おかす意=干か)」とから成る。犬が人を害する意。ひいて、「お  
かす」意に用いる(『大字源』)のように形声文字とするが、『漢字源』『常用字解』は、  
「会意。弓かは、下から伸びるものに対して匚型のワクで押さえたことをあらわす。犯  
は「犬+弓(わく)」で、犬がわくを破ってとび出すことをあらわす(『漢字源』)、「会  
意。𠂔<sup>けものへん</sup>と匚<sup>はん</sup>とを組み合わせた形。𠂔は獣の形。匚は人が前向けに俯く形であるから、字形  
のままに解釈すると、人が獣の上に乗るかかって獣を犯すの意味となる(『常用字解』)の  
ように会意文字として位置付ける。また、「知」も『新字源』『大字源』が「形声。もと、  
𠂔(さけぶ意。のち口に変わる)と、音符矢シ→ナ(つらねる意→陳ナ)とから成り、ことば  
をつらねて神に告げる意を表わしたが、転じて、物事のことわりを知る、認める意に用いる。  
一説に、口と矢とから成る会意の字という(『新字源』)、「形声。意符の𠂔(口は省略形。  
おどろきさけぶ意)と音符の矢シ→ナ(続けて並べる意=肆シ・陳ナ)とから成る。叫びを続  
け並べる、べらべらとししゃべる意。借りて、「しる」意に用いる。一説に、もと、智ナと同じ  
という(『大字源』)のように形声文字として位置付けるが、『漢字源』『常用字解』は、「会  
意。「矢+口」で、矢のようにまっすぐに物事の本質をいい当てることをあらわす(『漢字  
源』)、「会意。𠂔と口とを組み合わせた形。矢は神聖なものとされ、誓約のときにそのしる  
しとして矢を用いるので矢うとよみ、矢を折ることは誓うときの所作(しぐさ)であった。  
口は𠂔<sup>さい</sup>で、神への祈りの文である祝詞<sup>のりと</sup>を入れる器の形。神に祈り、神に誓うことを知といい、  
「あきらかにしる、しる、さとり」の意味に用いる(『常用字解』)のように会意文字とし  
て位置付ける。このような位置付けの揺れが存する漢字は、漢字指導の混乱の要因となろう。

#### 4.2 おわりに— 会意文字、形声文字の指導のありかた —

ここまで、小学校国語科における漢字指導のうち、会意文字、形声文字を中心に検討を  
行ったが、会意文字、形声文字の位置付けは漢和辞典によって異なっている。小学校高学年  
に対する漢字指導の混乱を回避するためには、まず、教科書に掲げる会意文字、形声文字に  
ついては典型例を掲げる必要があるであろう。漢和辞典によって位置付けが異なるような漢  
字は可能な限り掲げないようにする必要がある。

とはいえ、現行の教科書においては、本稿で取り上げたような位置付けに違いがある漢字  
が掲げられており、現実的には、このような教材を元にして授業をせざるを得ない事態も生  
じるであろう。その場合、指導者の側には、主要な漢和辞典を調査しておくといった教材研  
究が必要であるが、それとともに、会意文字、形声文字といった用語よりも、会意文字、形  
声文字における造字の原理に重点を置いた指導が必要であると考えられる。そういった意味  
では、教科書Aは、漢字の成り立ちの説明と、会意文字、形声文字といった用語の説明とを  
区分している点において工夫が認められよう。<sup>(8)</sup>

会意文字と形声文字の境界線が曖昧であることは、六書を提唱した後漢・許慎の『説文解

字』において会意文字と形声文字の中間例とも言える「亦声」の記述が<sup>(9)</sup>あり、また、清朝の説文学の大家である段玉裁も、『説文解字注』において、会意文字と形声文字の中間例について指摘している。<sup>(10)</sup>漢字の構成要素が意符と音符の双方の性質を有すること自体、『説文解字』編纂の時代から知られていたことであった点は、改めて想起してよいのではなかろうか。象形文字、指事文字、会意文字、形声文字、といった用語は、典型的な概念を表す用語であると言えるが、厳密な分類基準に基づいた用語ではない。用語だけが一人歩きしてしまい、厳密な分類基準に基づいた用語であるといったような誤解は避けなければならないであろう。また、漢字の由来について、指導者は、漢字の由来の解説に見える解釈がいずれも研究者の解釈であり、絶対に正しいと証明されたものではない、<sup>(11)</sup>ということも踏まえて、漢字の由来の指導を行う必要があると考えられる。

## 注

(1) 本稿で取り上げた第5学年、第6学年の教科書は次の通りである。

『みんなと学ぶ 小学校 国語 五年上』(学校図書、平成23年2月)、『みんなと学ぶ 小学校 国語 五年下』(同上、平成23年7月)、『みんなと学ぶ 小学校 国語 六年上』(同上、平成23年2月)、『みんなと学ぶ 小学校 国語 六年下』(同上、平成23年7月)、『ひろがる言葉 小学国語 5上』(教育出版、平成23年1月)、『ひろがる言葉 小学国語 5下』(同上、平成23年6月)、『ひろがる言葉 小学国語 6上』(同上、平成23年1月)、『ひろがる言葉 小学国語 6下』(同上、平成23年6月)、『新しい 国語 五上』(東京書籍、平成23年2月)、『新しい 国語 五下』(同上、平成23年7月)、『新しい 国語 六上』(同上、平成23年2月)、『新しい 国語 六下』(同上、平成23年2月)、『国語 五 銀河』(光村図書、平成23年2月)、『国語 六 創造』(同上、平成23年2月)

(2) 漢和辞典等の記述の引用にあたっては、数字の表記はアラビア数字に統一した。また、本文の表記や改行等に変更を加えた箇所があるが、知的意味が変わらないようにした。なお、諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店)は、解字の項目において、主として象形・指事・会意の3種の文字について、その文字の構造と本義とを説明し、更に各種訓義の発生する経路をも明らかにしようとしているが、基本的に形声文字については掲げていない。そこで、『大漢和辞典』については、必要に応じて適宜参照することとした。

(3) 本稿では、〔1〕『角川 新字源』は1987年266版を、〔2〕『漢字源』は2009年改訂第4版第5刷を、『角川 大字源』は1992年初版を使用した。

(4) 『常用字解』については、2004年初版第4刷を使用した。

(5) 『新字源』は、同付録において、「刀に対する刃などのように、強調する符号を加えて表したのが、いわゆる象形指事である」と述べ、「複合文字を造る第一歩」として位置付



ける。

- (6) なお、「明」については、今回調査した4種の漢和辞典はみな会意文字として位置付けるが、『大漢和辞典』は、会意形声文字として位置付けている。
- (7) なお、『大漢和辞典』も、「会意。心内に認識すれば言葉として口に発すること矢の如く速やかなる故に、矢と口とを合せて、しる意を表はす」のように会意文字として位置付けている。
- (8) 本稿で取り上げた教科書A、教科書B、教科書Cは、象形文字、指事文字、会意文字、形声文字の用語を掲げるが、本稿で調査したその他2種の教科書の中には、これらの用語を掲げず、「物の形をかたどったもの」「ことからを印などでしめしたもの」「意味を合わせたもの」「音を表す漢字と意味を表す漢字を組み合わせたもの」といった造字の原理のみを掲げる教科書も見える。
- (9) 「亦声」については、白川静『説文新義 卷15』(第4章3「六書法の問題」、白鶴美術館、1973年)、大橋由美「文字学階梯(4)－「字」その②「会意」－」(「新しい漢字漢文教育」43、2006年)を参照。
- (10) この点については、大橋由美「段玉裁における”形声包会意”などについて」(「人文学報」234、1992年)を参照。
- (11) この点については、阿辻哲次・加納義光・木村秀次・小林一仁「漢字のなりたち Q&A－字源で読み解く漢字の世界」(「月刊 しにか」12、2001年)をも参照。

**A Study of Teaching of Kanji  
in Japanese Language Education  
—about Kaiti-Moji and Keisei-Moji—**

Toshihiro OKUDA

Division of General Education, Kyushu Women's University  
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu 807-8586, Japan

**Abstract**

This paper considers teaching method about Kanji in Japanese language teaching. Out of explanation related with Kaiti-Moji and Keisei-Moji in schoolbooks of elementary school, this paper considers the positioning of Kaiti-Moji and Keisei-Moji in dictionaries. And, this paper analyzes teaching method about Kaiti-Moji and Keisei-Moji.

About guidance of Kaiti-Moji and Keisei-Moji, it is necessary both the mean of terms and the concrete explanation about the costructure of Kanji.

